



Title	20世紀における英仏哲学の交錯に関する一試論 : L. S. Stebbing 『プラグマティズムとフランス自発的行動主義』を読む
Author(s)	磯島, 浩貴
Citation	共生学ジャーナル. 2018, 2, p. 93-110
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70628
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

研究ノート

20 世紀における英仏哲学の交錯に関する一試論

—L. S. Stebbing 『プラグマティズムとフランス自発的行動主義』を読む—

磯島 浩貴*

An Essay on the Interactions between British and French Philosophy in the 20th Centuries

On Reading "*Pragmatism and French Voluntarism*" by L. S. Stebbing

Kouki ISOSHIMA

1. はじめに

20 世紀を代表する哲学者であるフランスのアンリ・ベルクソンは、1907 年に主著『創造的進化』を出版して以降、その名声を国内外問わず確固たるものにした。また、イギリスにおいて 1910 年から 1911 年にかけてベルクソンの主要著作・主要論文が英訳された。この海外輸出を受け、ベルクソンは 1911 年にイギリスで講義・講演を三回行う。これらの講義の内、ロンドン大学で行われた講義で、ベルクソンは 1900 年前後のイギリス哲学界を席卷していた新ヘーゲル主義の観念論哲学に批判を行ったバートランド・ラッセルと初めて対面する。その翌年の 1912 年以降、ラッセルは自身の哲学上の批判対象を F. H. ブラッドリーからベルクソンへと変更することになる。

確かに、経験論や自然主義に反対し、ドイツの観念論や唯心論の哲学を導入した新ヘーゲル主義者ブラッドリーから、当時の現代思想であり唯心論的な哲学であるベルクソンへとラッセルが批判対象を変更するという事態は明瞭である。しかし、この事態はそれだけではない。誤解を恐れず言おう。一見、ラッセルのベルクソン批判のレベルは特筆するほど高くないし、その批判もベルクソン本人に限定して向けられているか非常に判別しづらい。また、ラッセルのブラッドリー批判は一般的な哲学史の教科書においても無視されないが、ラッセルのベルクソン批判は無視されてきた。これらの事

*大阪大学大学院 人間科学研究科 共生の人間学 博士前期課程 (koukiisoshima@gmail.com)

情を受けて、私たちはラッセルのベルクソン批判の「イギリス的」背景を明らかにする必要がある。すなわち、ベルクソンを受容する土壌となった、当時のイギリスで共有されていたフランス哲学及びプラグマティズムの理解の水準を明らかにする必要がある。

そこで、本稿で私たちが着目するのはリジー・スーザン・ステビィング (Lizzie Susan Stebbing、以下ステビィングで統一) の処女作 *Pragmatism and French Voluntarism* (以下 *PaF* と略記する) である。この著作を繙くことで、私たちはラッセルのベルクソン批判の背景の一端を理解できるようになるだろう。

2. L.S.Stebbing とは何者か

はじめに、本邦ではメジャーではないステビィングという哲学者についての簡単な紹介を行おう。彼女は 1885 年にロンドンの北部で六人兄妹の末っ子として生を享けるが、健康面では生涯を通じて病気に悩まされていた。彼女は 1904 年にケンブリッジ・ギルトンカレッジへと進学し、当初は歴史学を研究していた。しかし、ケンブリッジに在籍している間、彼女はブラッドリーの主著である『現象と実在』を読み、これを契機に彼女の知的関心は哲学へと向けられる。その後、彼女は学位取得のためロンドン・キングスカレッジへと研究の場を移し、1912 年に学位論文として *PaF* を提出する。そして、彼女はイギリス哲学史上初めての女性の哲学科正教授として 1933 年にベットフォードカレッジのポストに就任する。また、1914 年から 1933 年までの間に、彼女は分析哲学へと哲学的「転回 converted」を果たす。その契機は、彼女が 1917 年にロンドンで開かれたアリストテレス協会において、ラッセルと共にケンブリッジの新ヘーゲル主義へと反旗を翻した G・E・ムーアと出会ったことである。その時以降、彼女は分析哲学への関心を強める。そして、彼女の哲学者としての地位を確立させた代表作であり、「分析哲学」の最初の教科書となる『現代の論理学入門』(*A Modern Introduction to Logic*) が 1930 年に出版される。こうして、彼女は後の論理実証主義やケンブリッジ分析学派の中心人物となった。しかし、彼女の健康状態は悪化の一途を辿り、1943 年に 57 歳で癌によって亡くなる。

次に、ステビィングが現代の哲学においてどのような立ち位置を獲得し

ているのか確認しよう。*The Oxford Handbook of The Analytic Philosophy* の編集者であり、フンボルト大学に所属している現代分析哲学の泰斗であるマイケル・ビーニーは、ステビィングは近年再評価の機運が高まっている哲学者の一人と断りを入れた上で、次のようにステビィングを分析哲学史の中に位置づける。「分析哲学のストーリーにおけるステビィングの役割はしばしば見落とされている。1930 年に彼女は『現代の論理学入門』を出版し、それは分析哲学において初めての教科書とみなされうるものであった。初版での彼女の序言は「論理の学問はまだ確立していない」という主張で始まり、また彼女は、イギリスの大学で使用される全ての教科書は過去 50 年間に起こった論理学の発展へ何の言及もしていないと述べる。この事態を修正することを始めるにあたり、彼女は『プリンキピア・マテマティカ』の論理的なアイデアやラッセルの記述の理論から、科学的方法論や定義の理論まで幅広い話題を扱っている (Beaney 2013:43)。このように、最初期の分析哲学者としてステビィングを再評価する試みが現代においてなされている⁽¹⁾。

では、なぜ本稿がステビィングの最初の著書 *PaF* に着目するのか。ステビィングを分析哲学者として全面的に位置づける上記のビーニー理解は、一後の展開がそうであるとしても—*PaF* を書いた彼女の姿を後退させることになる。ここで私たちが描くのは、ブラッドリーに傾倒するところから哲学を始め、当時の現代思想であるプラグマティズムとフランス自発的行動主義をイギリス哲学界に紹介したステビィングの姿である。実際、『英米の多元論哲学』で英米哲学をフランス哲学界に紹介したジャン・ヴァールも、その著書の参考文献の中に *PaF* をあげている。したがって、当時イギリスで流行していたベルクソニズムないしプラグマティズムの理解のレベルを示す一つの指標として *PaF* に私たちは着目する。彼女の仕事は、ベルクソンとラッセルの交錯という 20 世紀における英仏哲学の交錯の一側面をも描きうるものなのである。

3. *Pragmatism and French Voluntarism* の主題と概略

PaF でのステビィングの議論は、イギリスにおいて「新しい哲学 (New Philosophy)」として本格的に受け入れられたベルクソン哲学とプラグマテ

イズムを紹介するというものである。私たちが、彼女の試みを理解するにあたって鍵となるのが、ベルクソンもジェイムズも「真理 (Truth)」に対して「反-知的方法 (anti-intellectual methods)」を取るという主張である。私たちはまず、*PaF* 第一部に基づいて、ステビィングが提起する「新しい哲学」の性格を確認する[3.1]。次に、ベルクソンの著作についての彼女の理解と[3.2.1]、ベルクソンの直観についての彼女の主張を確認する[3.2.2]。

3.1 問題の提起—現代哲学の二つの傾向

PaF 第一部の議論を大まかに確認しよう。現代哲学は「平凡な人」の時代をいかにして乗り越えるかということを目指している。それは、人間は社会的な存在であるという事実を中心に据えて人間のあり方を考える時代でもあるとステビィングはいう。言いかえれば、社会的な存在である人間という事実が私たちの生活に実感する形で広がり、この直接的な社会意識の中で社会的な人間という概念が哲学に徐々に浸透してきた、ということである。この事態において、現代哲学は、これまでの哲学とは異なる二つの傾向が見られるとステビィングはいう。

一方は、哲学を生に密接に結びつく状態にし、また人間の内に自由を発見することを確実にするほどあらゆる偶然性 (contingency) が現れる傾向である。他方は、概念的認識の能力としての知性を捨て、また実在と密接に触れるような「知覚 (perception)」のより高度な形式へと変わる傾向である。(Stebbing 1914:4)

一つ目の傾向は、人間の生活から離れた空虚な思弁から哲学を私たち人間の生に密接に関わる形で捉え、その社会の中で人間の自由は偶然性と結びつくということである。もう一つの傾向は、これまでの哲学で支配的であった対象を概念によって認識する知性という能力から、実在をダイレクトに捉えうる知覚のより高度な形式へと転換することを訴えることである。この二つの傾向に共通しているのは「知性批判」であるとステビィングはいう。というのも、一つ目の傾向は知性による確実性への探求から生の中で偶然性を発見することへと変更することが求められているし、もう一つの傾向は知性を捨ててより高度な形式の「知覚」によって実在を捉えることを求め

られているからである。この「知性批判」と密接に関わっている哲学が、プラグマティズムとフランス自発的行動主義だとステビィングは述べる。

まずはプラグマティズム—特にジェイムズ—から確認しよう。ステビィングの理解によると、生の事実を巧みに操るジェイムズにおいて、社会的な存在である私たちは、空虚な思弁から離れて生そのものに密接に結びつく必要がある。なぜなら、ジェイムズにとって、知識は行動よりも重要性が低く、行動の方法において有用なものは、その信頼性 (trustworthiness) の最高基準となるからである。それゆえ、ジェイムズにおいて、感覚的な性質は真理を決定する知的性質のレベルまで引き上げられる。すなわち、ジェイムズの哲学において、私たちの感覚に論理的な推論によって獲得される根拠以上の権利を与えなければならない、とステビィングはいう。ジェイムズの哲学において必要なのは「ヴィジョン (Vision)」であり、このヴィジョンによって非知性的な感覚的な真理が取り出される。つまり、知性的な営みである論理的な推論には、初めから感覚といった非知性的なものを包含しておらず、私たちの生そのものの「必要性」といった論点は排除されている。こうして、反知性主義的な性格を持つジェイムズは、ヴィジョンによって得られた真理と生そのものの「必要性」を重ね合わせる、とステビィングは述べる。

では、フランス自発的行動主義はどうか。ステビィングの理解によると、フランス自発的行動主義の知性への批判は、時間の概念に起因するカントのアンチノミーと、ゼノンのパラドクスを連続体として解決するには、知性は無能力であるという主張に基づいている。それゆえ、フランス自発的行動主義が偶然性を主張することは、「反-知性主義的な状況主義 (anti-intellectualistic temporalism)」の帰結だと言える。また、フランス自発的行動主義—特にベルクソン—は、私たちの個人的経験の最深部への関心が強く、社会的な日常生活からの分離といったものを目指す唯心論的な傾向が強いとステビィングは指摘する。ベルクソンの議論は私たちの自我に通約不可能な二元論を設定し、その個人的経験の最深部に位置する自我を実在と捉えている。そして、その自我を獲得するには「直観 (intuition)」という高度な知覚形式を必要としている。しかし、ベルクソンも知性的推論ではなく、生と密接に結びついた哲学こそが自身の哲学であることをステビィングは明言する。

哲学を具体的な経験の方へ推し進めたという意味で、ジェイムズとベルクソンは哲学的に重なっており、「新しい哲学」の地平を開いているとステビィングは評価する。しかし、両者を細かく検討すると、彼らの哲学的立場は異なっているとステビィングは指摘する。ジェイムズは初めから人間は社会的な存在だと考えており、その人間は関心によって結びつき、その中で私たちに与えられた理論の実際上の差異は何かということを追求する。それに対して、ベルクソンは、日常生活の下に流れる実在へと浸透するために、社会的存在としての人間ではなく個人としての人間へと目を向け換え、決して完成には至らない純粋な個性の獲得を目指している。すなわち、ジェイムズとベルクソンは、反知性主義的方法によって私たちの具体的な経験から哲学を再開させようとした点では重なるが、「社会的な生」から価値を引き出せるか否かを巡って、その立場は大きな違いとして現れるのである。

3.2 ベルクソンの「直観主義」—唯心論的行動主義

PaF 第二部「フランス自発的行動主義哲学の本性」は、*PaF* 全体の四分の三を占めている。ステビィングは、フランス自発的行動主義全体を「唯心論的行動主義 (Spiritualistic Activism)」、「ルヌビエの新批判主義 (The Neo-Criticism of Renouvier)」、「力-観念の哲学 (Philosophie des Idées-Forces)」と、大きく三つの章に分けて論じている。しかし、本稿では一つ目の「唯心論的行動主義」に焦点を絞る。ステビィングによると、「唯心論的行動主義」とは、メヌ・ド・ピランから始まり、ラヴェッソン、ブートルー、ベルクソン、ル・ロア、ウィルボアを含む方向であり、個人的な経験とその経験の行動的な性質を採用することによって出てきた哲学である。また、この哲学は近年、神秘主義の方向へと傾いており、反-知性主義的である一方でドイツロマン主義の哲学に似た「直観主義」である (Stebbing 1914:130)。ステビィングは、この「唯心論的行動主義」という哲学派の中でも、ベルクソン哲学を「創造的進化の哲学 (philosophy of creative evolution)」と呼び、「少なくとも英語圏において、ベルクソンの見解は過去に何のルーツも持たないように思われる新しい力を伴っていた」 (Stebbing 1914:36) と評価する。ベルクソン哲学に内在する「新しい力」を明らかにするためには、ベルクソン哲学の発展過程を確認する必要があるという主張のもと、ステビィングは *PaF*

二部においてベルクソン哲学の紹介を行う。

3.2.1 ステビィングによるベルクソンの著作解題

ベルクソン第一の主著『意識に直接与えられたものについての試論』（英訳『時間と自由意志』、以下『試論』で統一）の主題は、意識に直接与えられている時間の本質を私たちの具体的な生の現れである「持続」と捉え、その持続に静的な空間的な表象を介入させることなく身を置く点にある。しかし、ベルクソンにおいて認識の本性は、この意識に直接与えられている時間の本質を捉えるようにはできていない、とステビィングはいう。というのも、ベルクソンが主張するところの知覚による認識は変化しないもの、すなわち、「空間」しか捉えられないからである。他方、知覚では捉えられない意識に直接与えられている時間の本質とは変化するものであり、これをベルクソン哲学は「実在」、「時間」、「持続」と定義している、とステビィングは述べる。したがって、初期ベルクソン哲学は、時間／空間の二元論が設定されており、ベルクソンは変化する時間をいかにして捉えるかということ自身を哲学上の課題としている、とステビィングは評価する。また、この二元論を初期ベルクソンは、知覚による社会生活への適応を専らの責務とする「表層自我」と、知覚のより高度な形式⁽²⁾によって社会生活への適応から離れた本来的な自己である「深層自我」という比喻によって表現している、とステビィングはいう。ベルクソン哲学において、思考、感情、記憶といった社会生活において直接必要性に迫られることはない意識の奥底に潜んでいる「深層自我」に持続、時間、実在が属しており、その本来的な自己の中で変化と持続を再び捉える努力をすることが求められる、とステビィングは述べる。

ベルクソン第二の主著は『物質と記憶』である。しかし、奇妙なことに、ステビィングは『物質と記憶』にはあまり言及せず⁽³⁾、ベルクソン第三の主著『創造的進化』への検討へと移る。ステビィングが『創造的進化』において着目するのは、私たちの生の内在的な力である「生の衝動(vital impulse)」が実在を作り出すというベルクソンの主張である。この「生の衝動」によって初期ベルクソン哲学の二元論的モチーフは一元論へと変化する。次の引用を見よう。

注目すべき点は、实在それ自体を作り上げている实在は、本質的に精神的な力 (psychical force)、すなわち「私たちが自由に行動する時に自分自身で経験する」精神的な活動 (spiritual activity) であり、实在のまさに本質である持続と同一である。「進化するにつれて未来の膨張に悩まされる過去の連続的な進展」とベルクソンが定義する持続は、精神の本性を記述しているのである。(Stebbing 1914:40-41)

この箇所はステビイングの『創造的進化』理解として重要である。というのも、ベルクソンにとっての实在は精神的な力ないし精神的な活動であり、持続と同一である、とステビイングが主張しているからである。この「精神的な力」とは、生の内在的な力である「生の衝動」のことであり、ステビイングはこの力こそ自己自身を超越することを欲する力だと定義する。したがって、ベルクソンにおける实在とは精神的な存在のことであり、この存在とは変化することであり、この変化することとは成長することであり、この成長することとは無際限に自分自身を創造する力である、とステビイングは推論を行う⁽⁴⁾。ステビイングは、ベルクソン哲学は最初期から時間の本質である「持続」を捉えることを目的としていたが、『創造的進化』において、持続の特徴である変化や運動といった概念は实在の究極的な本性の表現として理解されることになると述べる。それゆえ、ベルクソンにとっての实在とは、「より高度な知覚の形式」である精神的な力による「生成 *devenir*」の連続から形成されるものとして理解すべきであり、この意味で「創造的な進化の哲学」だとステビイングは評価するのである。

3.2.2 ステビイングによるベルクソンの「直観」理解

ステビイングは、ベルクソンの哲学には「新しい力」が伴っていたと評価していた。そして、その力とは「精神的な力」であるが、ベルクソン哲学の術語で言うならばこれこそが「直観」である。本節では、この「新しい力」を持つ「直観」に関するステビイングの解釈を確認する。

ステビイングによると、「直観」は明確に二つの方向に分かれている。一つは、1903年に『形而上学道徳評論』で発表された「形而上学入門」で論じられた、「哲学的方法 (philosophical method)」としての直観についてである

(Stebbing 1914:49)。もう一つは、1907年に『創造的進化』で論じられた、「進化の過程において意識の発展 (the development of consciousness in the process of evolution)」から生じた直観についてである (Stebbing 1914:49)。ステビィングは、ベルクソン哲学にはこの二つの直観が見られるが、両者を区別するには「本能 (instinct)」への言及が行われているか否かに着目すべきだと主張する。

「哲学的方法」としての直観に対して本能への言及は行われぬという事実は重要である、とステビィングはいう。実際、ベルクソンの「形而上学入門」において論じられる「直観」は、知性的な「分析」概念と対比される形で明らかにされる。分析は対象に対して相対的な外的視点を取り、対象を翻訳し記号的な表象によって対象を表現するため、対象の本質や絶対は捉えられない。しかし、直観は対象に対して直接的で内的な視点を取るため、対象を翻訳することも記号的な表象によって対象を表現することも必要ではなくなり、対象の本質や絶対を捉えうる。ステビィングによると、これが「形而上学入門」で論じられるベルクソンの直観であり、これは「一種の知的共感 (a kind of intellectual sympathy)」であるとベルクソンは表現する。

『創造的進化』で提示される「進化の過程において意識の発展」から生じた直観は、本能への言及が行われるとステビィングはいう⁽⁵⁾。『創造的進化』において、基本的に知性と本能は対立する形で描かれる。しかし、知性それ自身は本能をいくらか含み込んでおり、知性の核を取り巻く光り輝く周縁として本能という比喻をベルクソンは提示する、とステビィングはいう。この比喻の中でベルクソンが主張しているのは、本能は意識の中で呼び起こされなければならないこと、本能は認識へと折り返されなければならないこと、本能は反射して自分自身の意識にならなければならないこと、そして本能は直観にならなければならないことだ、とステビィングは主張する。したがって、ベルクソンにおいて本能は対象を「感じる (feeling)」という意味で「共感」と表現されている、とステビィングはいう。

こうして、ベルクソンの直観には二つの方向があることを確認した後、ステビィングはこの二つの直観に共通して込められている「新しい力」を詳らかにする。ステビィングは、「形而上学入門」で論じられた直観も、『創造的進化』で論じられた直観も、「論理的な形式化 (logical formulation)」から超越した本能という意味合いから外れるものではないとする。すなわち、ステ

ビングは、ベルクソンの直観は知性を超越しているか否かということこそが重要な点だと主張する。事実、『創造的進化』では、直観とは知性と本能が融合した知的認識の完成形とされている。それゆえ、直観と知性は対立していないどころか両者の間に本質的な差異は存在せず、ベルクソンにおいては、片方だけでは真理とは何か、実在とは何かという哲学の問題は解決できないという理由から、両者の対立は克服される、とステヴィングは述べる。

まとめよう。以上のようにベルクソン哲学の発展過程を確認したステヴィングは、ベルクソン哲学を連続的な形で探求を進めることができる「実証的形而上学 (positive metaphysics)」だと特徴づける。ベルクソンは科学と形而上学の相互独立性を認めながら、互いに相補的な形で哲学的な問題の解決へと向かう。言いかえれば、ベルクソンは人間の生命と精神とを成立させてきた生というものを哲学の主題に据えながら、生物学という当時最新の科学的知見を踏まえて、進化において意識が生じるという論理を直観によって超越することによって哲学を再構成しようとした。上記の意味でベルクソン哲学は「新しい力」を備えた哲学であるとステヴィングは評価する。

4. ラッセルのベルクソン批判の背景

本章では二つのことが論じられる。一つは、当時の哲学においてなぜ「知性主義 (intellectualism)」と「反知性主義 (anti-intellectualism)」との対立が一つの主題として取り上げられていたのかを明らかにすることである。そこで争われているのは「真理」への問いかけであり、これを導きとして私たちは「真理」という概念を巡って当時の哲学で問われていた主題を確認する[4.1]。もう一つは、*PaF* においてステヴィングがベルクソンとジェイムズとブラッドリーを比較検討しながら論じている箇所に着目し、ラッセルのベルクソン批判の意義とその限界を検討し、ステヴィングにおける哲学の目的を明らかにする[4.2]。

4.1 ステヴィングの中のラッセル—「真理」への問いかけ

当時の哲学においてなぜ「知性主義 (intellectualism)」と「反知性主義 (anti-

intellectualism)」との対立が一つの主題として取り上げられていたのか。また、この対立はどのような哲学の問題へと繋がるのか。それは、おそらく「真理」とは何か、そして何をもって真理だと言えるのかという問題系へと繋がるだろう。この「真理」への問いかけということを通きの糸としてステビィングの中のラッセル的要素を見出すことにしたい。次の引用を見よう。

現代哲学の顕著な特徴である知性を批判する傾向は、非常に多様な学派の著述家に共通であり、また、「反-知性主義」という一般的な概念は、近年プラグマティストたちによって主流となっており、いくつかの論点の重要な差異を隠蔽するだけではなく、目印 (label) として実際に役に立たないのと同様に極めて曖昧である。この否定的な表題は、主にブラッドリー氏への敵意を示すという目的で採択されたように思われるが、少なくとも、この場合において「知性主義者」という表題は特に不適切であり、誤解を招くように思われる。(Stebbing 1914:13)

この箇所ではステビィングは、一般的に定義される「反-知性主義」という概念は曖昧であると主張すると同時に、この反知性主義と対立させられる形で提示される「知性主義」という概念もまた不適切だと主張する。そこで、ステビィングは「知性主義」の特徴づけを積極的に行うのではなく、「反-知性主義」の特徴を際立たせることによって、「反-知性主義」と「知性主義」の区別を行おうとする⁽⁶⁾。そこで、ステビィングが着目するのが、真理に対する「反-知性主義」と「知性主義」の間にある態度の差異であり、ここから両者の区別をステビィングは説明しようとする。「知性主義」と「反-知性主義」の対立は、真理に対する態度の差異という問題系へ引き継がれる。ステビィングは「真理の区別」という論点を踏まえながら、この差異を論じようとする。次の引用を見よう。

次に、二つの問いが生じる。真理の本性とは何か？そして、真理の基準とは何か？この二つの問いは、多くの「反-知性主義者」、真理の基準をその本性とするプラグマティストや、真理の本性をその基準とするベルクソン主義的直観主義によって絶望的に混乱している。他方、真理の区別は知性主義者によって一般的に認識されている。例えば、ラッセル氏は真理の本性について論じている一方で基準の問いを明確に脇に置

くし、「真理の『基準』—例えば何か真理でしかないもの、私たちが真理として認識しようとする—は、私たちが必要とするものではなく」、むしろ、「私たちが知りたいのは真理の『基準』の本性における真理のあり方」だとジョアキム氏と断言する。(Stebbing 1914:56)

「真理の本性」と「真理の基準」の間の差異とは何かという問題—「真理の区別」とはいかにしてなしうるかという問題—は、反-知性主義者たちの間で絶望的に混乱している。それに対し、代表的な知性主義者であるラッセルとジョアキム⁽⁷⁾においては、「真理の区別」がなされている。この区別を行わない限り、真理の基準をその本性とするプラグマティズムと真理の本性をその基準とするベルクソン主義的直観主義も、真理の理論として崩壊するであろうとステビングはいう。というのも、プラグマティズムもベルクソン主義的直観主義の両方とも、「真理の本性」と「真理の基準」の混乱において「真理の理論」自体の定式化を、ステビングからすると失敗している。この意味で、ステビングの基本的な立場は知性主義寄り—ラッセル寄り—の見解を保持していると言える。事実、ベルクソンの「直観」に対するラッセルの批判も基本的にはステビングの見解と類似している。しかし、ラッセルとは異なり、「真理の理論」をいかにして構築するかということについて、ステビングはさらに考察を進める。それはちょうど私たちが詭弁 (casuistry) と理想の道徳 (Moral Ideal) とを区別できるように、私たちは真理の本性と真理の基準とを区別することができるのではないかとステビングは問いを立てる。つまり、「真理の区別」は行いうるということをステビングは主張しながら、「真理の本性に関する問いは、論理的に真理の問いに先立っている」(Stebbing 1914:57) ということを彼女は念頭に置きつつ真理の理論を構築することを試みるのである。このように、極めて「知性主義」的な観点に立ちながら、真理の理論をステビングは打ち立てようとするのである。

4.2 英仏哲学の交錯—ベルクソン、ジェイムズ、ブラッドリー

ステビングからすると、ジェイムズとベルクソンとを分ける差異は、ベルクソンとブラッドリーとを分ける差異よりも根本的なものではない。そ

れゆえ、ジェイムズは「ブラッドリーかベルクソンか」という形で現代哲学の状況をまとめたが、このジェイムズのまとめを「正確」に描きなおすことをステビィングは試みる。そして、この描きなおしの中で、ステビィングはベルクソン、ジェイムズ、ブラッドリーの真理に対するそれぞれの理論の限界づけを行い、彼女の哲学の目的を明らかにする。

ステビィングによると、ブラッドリー、ジェイムズ、ベルクソンは概念 (concepts) による認識を否定する。そしてこの三人の中でも、ベルクソンのみが高度な形式の知覚である「直観」を発見した、とステビィングはいう。しかし、ベルクソンにおいて知覚は本来的に「実在の否定」を導くもの、つまり知覚は実在を歪めるものであり、同時に観念／概念も具体的な生の経験から離れている。それゆえ、ベルクソンは知覚と観念／概念の両方から超越し、人間の条件を超えて実在に潜らなければならないと主張している、とステビィングは述べる。しかし、ベルクソンの直観が行われた時、言語は社会に適応するための道具ないし流れる実在を歪めるものとして見なされ、私たちは言葉を使わず表現せざるをえなくなる、とステビィングはいう。確かに、直観もヴィジョンも絶対に達しようという意味で「明晰な観念 (clear ideas)」を獲得することができる。しかし、それらは一瞬しか表れず、伝達不可能であり、根本的に不安定な認識能力である。それゆえ、高度な形式の知覚で獲得された明晰な観念は表現できず、これ以上の探求を拒むという意味で不気味なものであり、知性が異論を唱えようとしても失敗に終わることになる、とステビィングはいう (Stebbing 1914:152)。ここでステビィングはベルクソンの「直観」に目を向けながら次のように問題を定式化する。

問題は、このベルクソンの方法が哲学にとって満足できる立場であるのか？ということである。もしそうなら、新生児にはなることはないであろうが、真の哲学者は静かな神秘主義者になるであろうから、ベルクソン氏の著作を適切な指針とすることさえほとんど必要としないであろう！ (Stebbing 1914:153)

ベルクソンの方法を採用すると、私たちは「静かな神秘主義者」となり、真理を沈黙のうちで理解していることになる。しかし、理解した真理は一瞬のものであり、伝達不可能なものである以上、私たちはいくら「明晰な観念」

を獲得したとしても、それは自らの感覚の外部へと発せられることはない。そこで問題となるのが、「明晰な観念」や「神秘主義」という概念の相対的な価値とはどのようなものかということである。

ステビニングによると、この「明晰な観念」と「神秘主義」の間の価値を区別する問いは、宗教と哲学の間の区別の問いと結びついている。宗教の観点からすると、神秘的な要素が莫大な価値を有していることや、「神秘」という概念が畏怖の念や畏敬の念を浮かべているという見解においては、何かが語られる可能性がある。それゆえ、「神秘」という概念が消失されるならば、宗教が有している価値は当然失われることになる。しかし、哲学もこの宗教の道を進むべきなのか、また、何らかの神秘が有益な価値を有しているという理由だけで、本当に真理であると言えるのか、とステビニングは問う。ステビニングの答えは否定的なものである。確かに、私たちの知覚は現前から超越した実在を獲得するにはあまりにも無能力であるのに対し、宗教における「神秘」は現前から超越した実在を指し示すという意味で確たる価値がある。それゆえ、直観やヴィジョンのような超越的な認識能力は、絶対的な実在の確実性、日常的な生の限界を超越する「内在的な推進力 (impetus)」である。しかし、直観やヴィジョンが、一瞬で、稀で、伝達不可能なものであるならば、曖昧さを多分に含み込んでおり神秘以外の何者でもない、とステビニングはいう。

しかし、ちょうど合理的な存在としての私たちの把握を超越するということから、この内在的な推進力は一瞬で、稀で、伝達不可能なままである。ヴィジョンを安定させ、継続させ、伝達可能にし、そして認識の諸性質にヴィジョンを与えることが、私にとっての哲学の仕事である。そうすることでヴィジョンは失われない。ヴィジョンを明晰にし続けることによって、ヴィジョンは増大し、強度が高まる。(Stebbing 1914:153-154)

この箇所は、ステビニングがベルクソン、ジェイムズ、ブラッドリーらの理論への限界づけを行なっていると同時に、ステビニング自身の「哲学の仕事」がベルクソン、ジェイムズ、ブラッドリーを土台にして乗り越えることを試みている点で重要である。言い換えれば、ベルクソンの「直観」、ジェイムズの「ヴィジョン」、ブラッドリーの「絶対者を認識する論理学」といった、

各々の哲学理論において登場する真理の把握に必要な内在的な力は安定していないという点で明らかな限界がある一方、これからの哲学は内在的な力それ自身を安定させ明晰にし続けることによって、能力それ自体の強度を高めることが可能になるとステビンは主張している。それゆえ、ステビンからすると、ベルクソン、ジェームズ、ブラッドリーらの主張とは「一瞬で、稀で、伝達不可能 (fleeting, rare, incommunicable)」な曖昧なものという意味で「神秘主義」の主張である。この中でも、特にベルクソンが注目されたのは「直観」という概念が「精神的な力」という形で捉えられ、同時に「精神的な力」こそが「エラン・ヴィタル」だという一種の観念連合的な仕方でイギリス哲学に受け入れられたという事実は注目に値する。すなわち、ラッセルとステビンの間には同じ問題意識や背景が共有されていたということである。それゆえ、ラッセルはブラッドリーからベルクソンへと関心を移したと思われる。

では、ステビンにとっての哲学の目的とは何か。この「神秘主義」の理論を踏み台にして、ステビンは「最も広い意味での理性 (Reason) の領域へとヴィジョンを取り入れることによって、ヴィジョンを真の「認識」にするのが哲学の仕事である」(Stebbing 1914:154) と新たな形で「真理の理論」を構成しようとするのである。ステビンの *PaF* もまた、20 世紀における英仏哲学の交錯において、「真理の理論」という問題系がその一側面を描くものであることは明らかであるだろう。

5. まとめにかえて

全体のまとめにかえて、20 世紀における英仏哲学の交錯という観点から二点だけ述べることにする。

一点目は、*PaF* で論じられた「真理」に関する議論は、後の「論理実証主義」の哲学的展開へと繋がるものである。「論理実証主義」という哲学派は、過激な反形而上学的なテーゼと科学による世界把握という点に特徴があった。この哲学派における「形而上学」とは、ポパーの「推測と反駁」によるとアドラー、マルクス、フロイトの理論であった。しかし、これはオーストラリア国内での状況であり、イギリスにおいては *PaF* で紹介された「反-知性主義者」たちが論理実証主義者から見た「形而上学」に当たるものと考えら

れる。また、「科学による世界把握」の卓越した人物として論理実証主義があげているのは、ラッセル、ウィトゲンシュタイン、アインシュタインである。*PaF*においても、ラッセルは知性主義者として描かれていることは留意しておきたい。したがって、ステビイングの *PaF* は論理実証主義前史として読むことも可能だと思われる。

二点目は、*PaF* で論じられるベルクソン像をより正確に描き出すには、1911年にベルクソンが行った「精神の本性について」、「変化の知覚」、「生命と意識」という三つの講義を詳細に検討する必要があるということである。というのも、「精神」、「変化」、「生命」、「意識」のどれもが *PaF* で描かれるベルクソン像の鍵概念となっているからである。また、イギリスのベルクソン主義者たちもベルクソン哲学のこれらの概念を「新しいもの」として受容し、「真理」の問題へと応用する。他方、ベルクソン哲学に対するラッセルの全面的な批判の直接的な理由も、これらの講義に起因していると考えられる。

注

- (1) オンライン哲学辞典として世界的に有名な *Stanford Encyclopedia of Philosophy* において、2017年5月18日にステビイングについての独立の項目が作成され、そこでは分析哲学におけるステビイングの知的貢献が紹介されている。
- (2) ここで「知覚のより高度な形式」と表現されているものは、ベルクソンの「直観」概念に他ならない。しかし、ベルクソンは最初期の著作では「直観」という概念自体を定式化して論じていない。「直観」概念が定式化されるのは「形而上学入門」以降のことである。
- (3) ステビイングが *PaF* でベルクソンの『物質と記憶』に直接触れるのは以下のところのみである。『物質と記憶』において、持続の概念は空間ではなく時間の観点から表される関係であり、かつては精神と物質間の関係として説明したものだった。つまり、精神と物質間の差異は持続のリズムの間の差異である。精神は本質的には記憶であり、それは分散し無限に希釈された膨大な数の振動を縮約させる力であり、物質を構成する。精神は純粹記憶であるがゆえに過去を保持し、物質は全て瞬間に「新たに創造された」ものである。すなわち、物質は瞬間的な精神である。(Stebbing 1914:39)
- (4) ここで論じられている変化する実在を捉えるための「精神的な力」、「精神的な活動」、「生の内在的な力」、「生の衝動」といったベルクソンの諸概念こそが、当時ベルクソン哲学をイギリスに輸入した思想家、哲学者が強調していた概念であった。例えば、*Bergson Philosophy of Change* の著者であり、ラッセルと論争を行なったウィルドン・カーがその代表といっても良い。ウィルドン・カー

はベルクソンの『精神のエネルギー』を *Mind Energy* という英訳名で翻訳した。

- (5) ベルクソンの『創造的進化』や、ベルクソンがバーミングトンで 1912 年に行った「生命と意識」という講義がここでは関係している。
- (6) ここでステビィングは知性主義に対する反知性主義、知性主義者に対する反知性主義者の差異を問題にしているのであり、知性主義と知性主義者や反知性主義と反知性主義者の間に明確な意味の差異を設けていないと思われる。ここでは広い意味で捉えるようにしたい。
- (7) ハロルド・ジョアキムとは、ケンブリッジにおけるブラッドリーの同僚であり、主にアリストテレスやスピノザ研究を行っていた。その一方、これまで日本では「ブラッドリーの高弟」として紹介されており、ブラッドリーの遺稿を編纂した人物として知られていた。また、主著『真理の本性』は、*PaF* でも言及されている (Stebbing 1914:156)。

参考文献

一次文献

Stebbing, Lizzie Susan 1914 *Pragmatism and French Voluntarism*. Cambridge: Cambridge University Press.

二次文献

- Beany, Michael and Siobhan Chapman 2017. “Susan Stebbing”. The Stanford Encyclopedia of Philosophy, Edward N. Zalta (ed.) <https://plato.stanford.edu/archives/sum2017/entries/stebbing/> (2018/10/31 最終アクセス)
- Beany, Michael (ed.) 2013 *The Oxford Handbook of the Historiography of Analytic Philosophy*. Oxford: Oxford University Press.
- Beany, Michael 2013. “What is Analytic Philosophy?”. In Michael Beany (ed.) *The Oxford Handbook of the History of Analytic Philosophy*, pp. 3-29. Oxford: Oxford University Press.
- 伊藤 邦武編 2007『哲学の歴史 第8巻 社会の哲学』中央公論社。
- 伊藤 邦武 2007「総論 進歩・進化・プラグマティズム」伊藤 邦武編『哲学の歴史 第8巻 社会の哲学』pp. 19-47、中央公論社。
- 川口 茂雄 2007「19世紀フランス哲学の潮流」伊藤 邦武編『哲学の歴史 第8巻 社会の哲学』pp. 173-267、中央公論社。

久米 博・中田 光雄・我孫子 信編 2006. 『ベルクソン読本』 法政大学出版。

杉山 直樹 2006 「「知性の発生」と科学論—『創造的進化』読解のために」 久米 博・

中田 光雄・我孫子 信編 2006. 『ベルクソン読本』 pp. 81–91、法政大学出版。

船木 亨 2016 『現代思想史入門』 ちくま新書。